



玉津婆喜

^ 13
2920
1



13
2920
1-4

門へ13
2920
1

庄
六十八号

イ
三
松山本所
三丁目
野中栄三郎
代貸本所

昭和九年
七月六日
購求

玉鄰羽喜乃序

特筆玉は玉の八千代とら婦人文章の

手本不目訓と理安達の能知学まづ玉

畫一で書らうとあつたおどけ儀の文がゆく

瀬川如皋の筆の綾法存志とれ玉

屋の淨瑠璃とよく出向くと怪家も好ま

志也ぢんの玉は秀句うらたぬく思ひ
付しふあらねどこま六作者が年々へ
秘蔵に及び金至の論より尊とま
孝女と貞婦チト湯事ハ少條はま
心も誠と實真切の玉を双ぐ教訓
人情玉はを紀の八千代までも傳く事

勸善懲惡乃雙帝と自慢の玉乃題
号例の拙き作とハいひと孝と貞と
児女方の鑑ともまづ慈歎慈愛風
諫をくぞおのづら無頼の父を大善
人と轉ドかふる孝子のいさや一慈父
深愛の有ぐこま惠小處女も貞操を

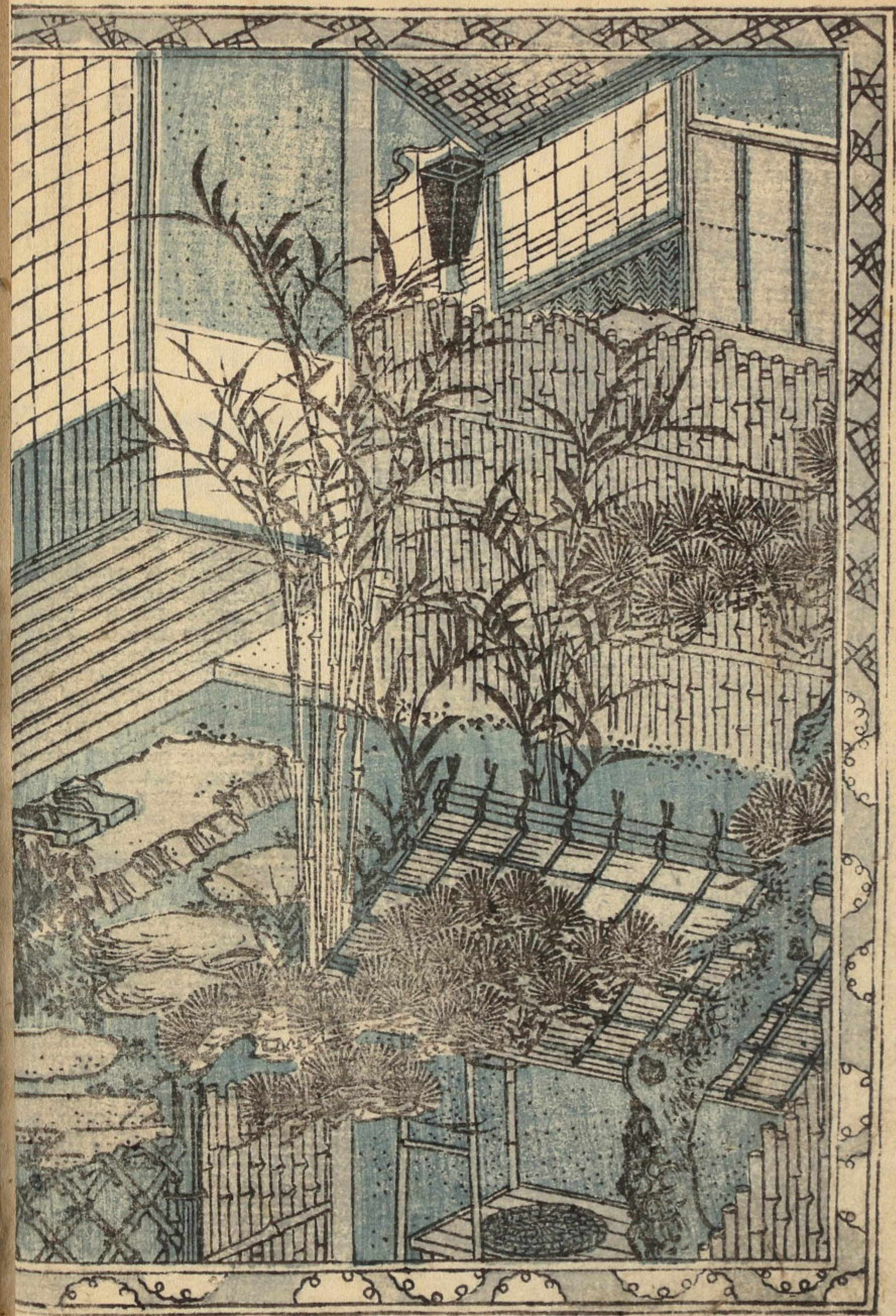
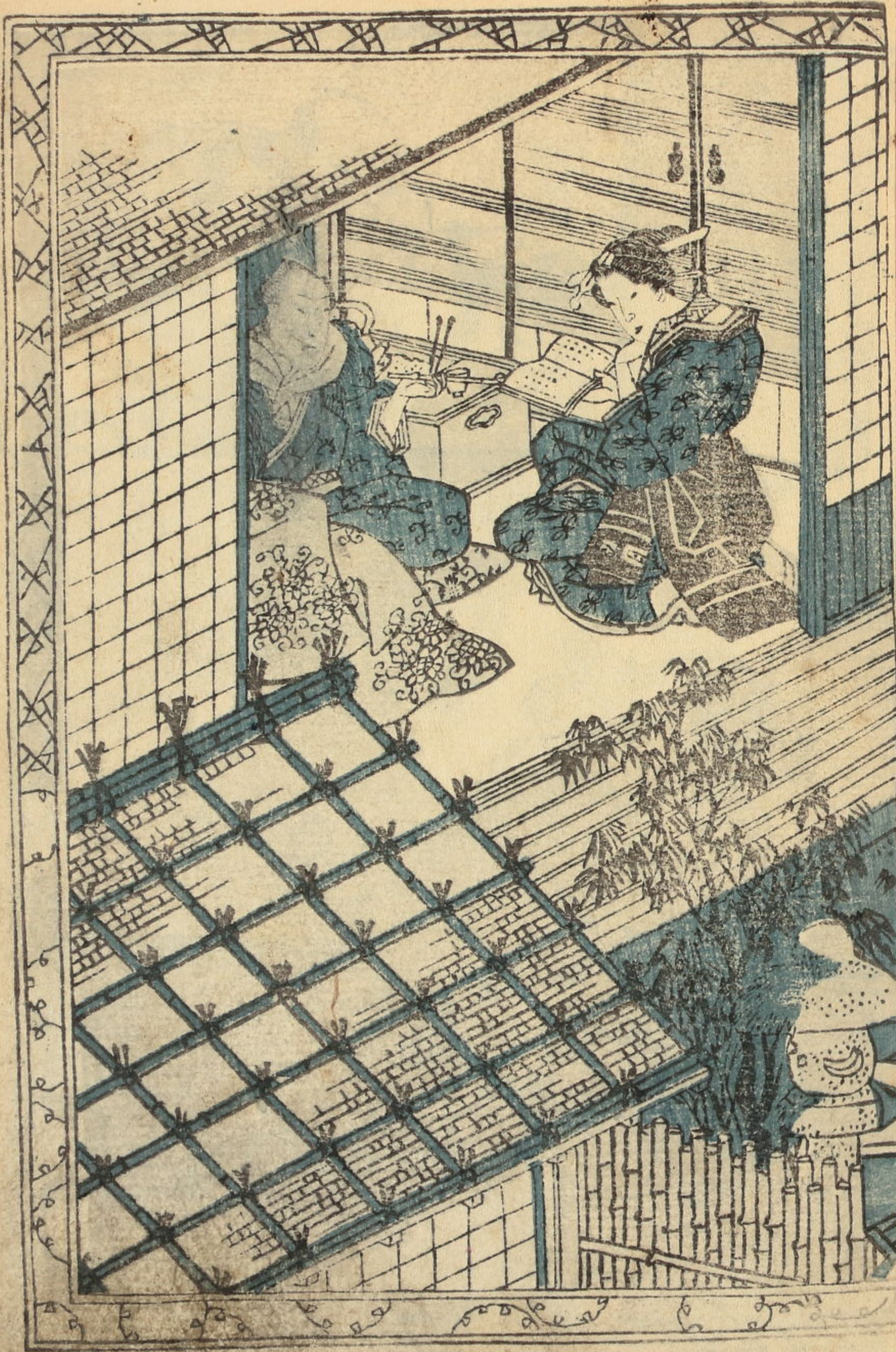
りで度酒もる古今の美談句も
 椿の種数も稀ある新販子
つばき ことば たら たら たら

江戸人情本一流の元祖

蓮池菴 為永春水誌



目ふりゝゑ
 まるほしとち
 わりぬら
 花の葉おち
 狂文より春江





孝女 真都 真都 騎喜 初編 上之卷

第一回

江戸 狂訓亭主人作

水の流るる人の身の強(も)古に葉が軒をどく好む
小あし孫ども薄命くろ 錯簡をあらがきくあつ小
河あひしき旧業をいひかき今を悔しき徳姫居元
と祭苑の徳町辺小会庫の二ヶ所も持たし一夏田
屋満更情とて豊ふくせし人ありしか終の向小零落



あゝ誰かよういぬらぐちを覚へては来ぬひもあま
で畑々その業ふかすりのとまる程ふありそまが却て身
の他とあらうくしゆく休あり妻子の衣類らりまもさ
あり他のものを借来りて貸ふ入して六元ぬは
その僅りのあき日ぬ酒をさへきむぐうくか
言の外ハあらうくか今日も何雨でも負腹をたぬ
春どきそ法酒の碑がまらりく一程ち上戸宅ふ入る
より中の間ふ倒さくちどくく言らびき女房は清ハ

是もてふもいふ程一程ほど真実の心たぐくま
くん彼もまふさうくくまぶくき中ふ今と一十二
ふありより一おますとりぬ娘を賣ていとどあぐ
幾一が丈満き情を清く世間も程もいとどそ
毎時候座の使ひぬぬ女走りか早け目だ清をゆ
よりらち清くとそも身を追ま使とあ一日か幾こひ
あつせし程見の知どぞ款らりてきて満き情ハ折癖
の愛ふもその目を見一万イ今らひつけと用ハ

どうしてイ何ぞ一八何をともく保てきぐ
 新へゆくそくの温袍をとりふきこころいよ
 何とていひなきは移りものをとりまよりをゆく
 北へはね袢きん起す枕を女房お授付あらぐ
 移りあふがあらものる寄授けゆらうくへそやアがう
 はらぶヤイも増えゆく性むねをとめて来り何ぞ保とりふ
 人と何新ぶらけ子一八の男も性むねとくや移りうん
 ちゆり人なま荒長屋の中八ちゅうちやう所不居らアきりくと性ア

ぐさまアまいいちやくちやく性むねとくとく来りてヨ一八ちゅうちやうううちやくちやくへて途
 中ちゆうで奪はらひていいふ家一八ちゅうちやうは實じつ屋一持いちぢりゆのか
 五へいふちもあうるち及びさ福してマ一且いち端たんのそまわ+
 骨ほねきしをむかすまわがアよひくへくとまわりつけし
 んちやくと性むねがらよくまうらゆ不ふあふちを涙なみだえ
 わくしやく城しろきゆてゆく母ははのか清きよい痛いたむゆふをさる
 どと小樽こづく奴やつのそかる使つかひのきこ怒いかりさ火ひおけり
 娘むすめの清きよと着きらふまわが清きよい家いへて



まゝに〜
の便ゆゑに〜
いふ〜
うき〜
かた〜
と〜
ね〜
た〜

まゝに〜
いせ〜
の〜
中〜

おとくゆく長きや 母子の歳入申す 男ははははとそく
りけり 嬌しき日の有りとも 如きぬまがしき 怒りとも
あつえくまのぶ 浮世男 彼はあま中 男ま坊ゆ春
づる酒の酔いさめてすまし 小志のちかはもの
ま 万アリ 潮と 掬う 室を 暮る かの 清やめ 成る
くまろ 何ぞ ぬる 今 ぬる ぬる ぬる ぬる ぬる
續る そしと かの 増が おぬる 味 堅清 ぬる ぬる
まどわの子か ぬる ぬる ぬる ぬる ぬる ぬる ぬる ぬる

わはは 焼て ぬる ぬる ぬる ぬる ぬる ぬる ぬる ぬる
お 焼の ぬる ぬる ぬる ぬる ぬる ぬる ぬる ぬる
か ぬる ぬる ぬる ぬる ぬる ぬる ぬる ぬる
あま ぬる ぬる ぬる ぬる ぬる ぬる ぬる ぬる
ぬる ぬる ぬる ぬる ぬる ぬる ぬる ぬる
ぬる ぬる ぬる ぬる ぬる ぬる ぬる ぬる
ぬる ぬる ぬる ぬる ぬる ぬる ぬる ぬる

わわよ ぬる ぬる ぬる ぬる ぬる ぬる ぬる ぬる
ぬる ぬる ぬる ぬる ぬる ぬる ぬる ぬる
ぬる ぬる ぬる ぬる ぬる ぬる ぬる ぬる

己廿此知一者お入り
ハイト 後あきく父の御人まらんと
追くしむせ 一者今の中らぬるをりよのいふをわれ
があしはあつるとたもまゝのう 一ハイ先別 曾あかのみ
まへの筋は通ひつてとらる人か口入人まゝ居んぬを
曾あかゆつとまむ人氏志をまむとらあつとまゝ捕あか
りたひれぞ 逢しちやアあつとまむとまむ一いつて
ちりく宅へいそひを逢て 逢まうしと今よまがくま
おまへのかりんぬれが志むとらあつとまむとらあつとまむ 曾あか

あつとまむとらあつとまむとらあつとまむとらあつとまむ
おんやあまのいそひを逢て 逢まうしと今よまがくま
あくれコトらひら 逢まうしと今よまがくま
よせく 一ヤレく かいとらあつとまむとらあつとまむ
子どもぶつとらあつとまむとらあつとまむとらあつとまむ
曾あかゆつとまむ人氏の氏 曾あかゆつとまむ人氏の氏
一 曾あかゆつとまむ人氏を捕へりしと今よまがくま
おま 曾あかゆつとまむ人氏があつとまむとらあつとまむ

狂刺亭主人為永春水近奉門人代作水の
とまらぶまことま情の勢風は常はつらと深居を
りりめ貞操はとえ巻甲の思ふかめけとも
く丈夫は大切よあすこのことまをうらうら
深なる西六眼を角七孝文の場をよとて入その牙小
うらまうー○又次の條下もあ増が舟の上るま
所の愛り發信の件前文とるる不さるバ看官
信が別小ありくうらとあやしくまあとうら

第二回

吳竹の根着の里の隠居住持世ふを自一本うらうらぬ
久の全盤をらふ根引の楽くま又婦あうまは若限居
亭より年数三十二六排名を三曉とよび自統と經よま
好漢女房が里六二十七八小里が人不知まはる昨日のむ
しを今日まはまの伊達とらるる一配りさかの字名付て
福々々陰毒の若敷も内納文が流りくふうも不
中由小紋も倦く結城縮緬の替り筋下若ハ白黒相



うきいヨおまると由さんハト戸を承知ぐおんむごうら
 つでもお土産がふのーもぶ一カヤ私やア櫻川の軽きま
 ともを日をもとましと且ねどうぞ由次郎が お軽ひ中まに
 若孝の遊音の後夕をまとおつめまほがどうぞ且ね一
 首おむぐひヤともしくさろと中ましと一々さうの若
 孝もわい子を志ろけのうそさでもは次郎の件判が
 りう若孝のうげが若孝も嫉しうらうトひ中まそのハ
 務もへおき女不長付と田川を一人をまらせ意味ゆのをバ

とう奇馳走をのびふまごさうく不新世帯坂川柳小
 その尚産屋も繁菊の環がかり
 トりいむどおき中あらあど何子も瑞うく一解小
 ぶひ不惚合と廓ふありの一志きりハ三晩も幼尚を信
 その名も浮名をふらふとせせさるる中めあふ人
 よりも舞どけお流くおんハ行時も他屋ハ母りくくあき公
 友遠をもりをふらふとけ宅どおせさく妻はみ一た
 き狗あふ一あうくあうあふ一モシ遊しちやアありません

あんでも娘むすめ子こどもの世よ智ちふく〜とのひあんなりわめ豊とよ満まんるる〜
いふいせんせ〜そとびつやア和十わじゅうさんさんねんねんぞぞ六む痴ち狂きやうくく
他た小せう樽ずんががららととははまませんせんうう子こ和わ
十じゅう二に私わたしの中なかのの八は意い味みののああるる子こぐぐ〜
んんでもでも舞まい臺たいをを知しりり居い居いるる自じ慢まんハハ變かりりるるででああのの十じゅう井い
のの子こへへモモ且かつ明あきちちとと樽ずんをを見みてていいままははるるアア〜

孝女 娜な真ま都つ翳おき喜き初はつ編へん上じやう之の巻まき終

貞婦 娜な真ま都つ翳おき喜き初はつ編へん中ちゆう之の巻まき

江戸 狂訓亭主人著

第三回

三エコウ三エコウ和十わじゅうさんさん世よの中なかの流りゅう石いしととああのの八は明あきちちららうう〜
ものものふふろろハハエエ左さ端はたががとといいままははるる目め録りく〜
いいままははるるトトいいふふ中なかああもも養やしやう者者やや朝あさ筒つつハハ実じつ意いののめめハハ
目めるるのの娘むすめハハ〜
いいままははるる不ふ実じつ者者がが立たててぬぬるる姿すがた形かたちもも出でまますす〜
いいままははるる又また悪わるいい子こトトいいままははるる〜

おのふまゝの出来は世見宿祿とせど
 も酒いづも素良の素丸を自のた角か
 大因のまのた

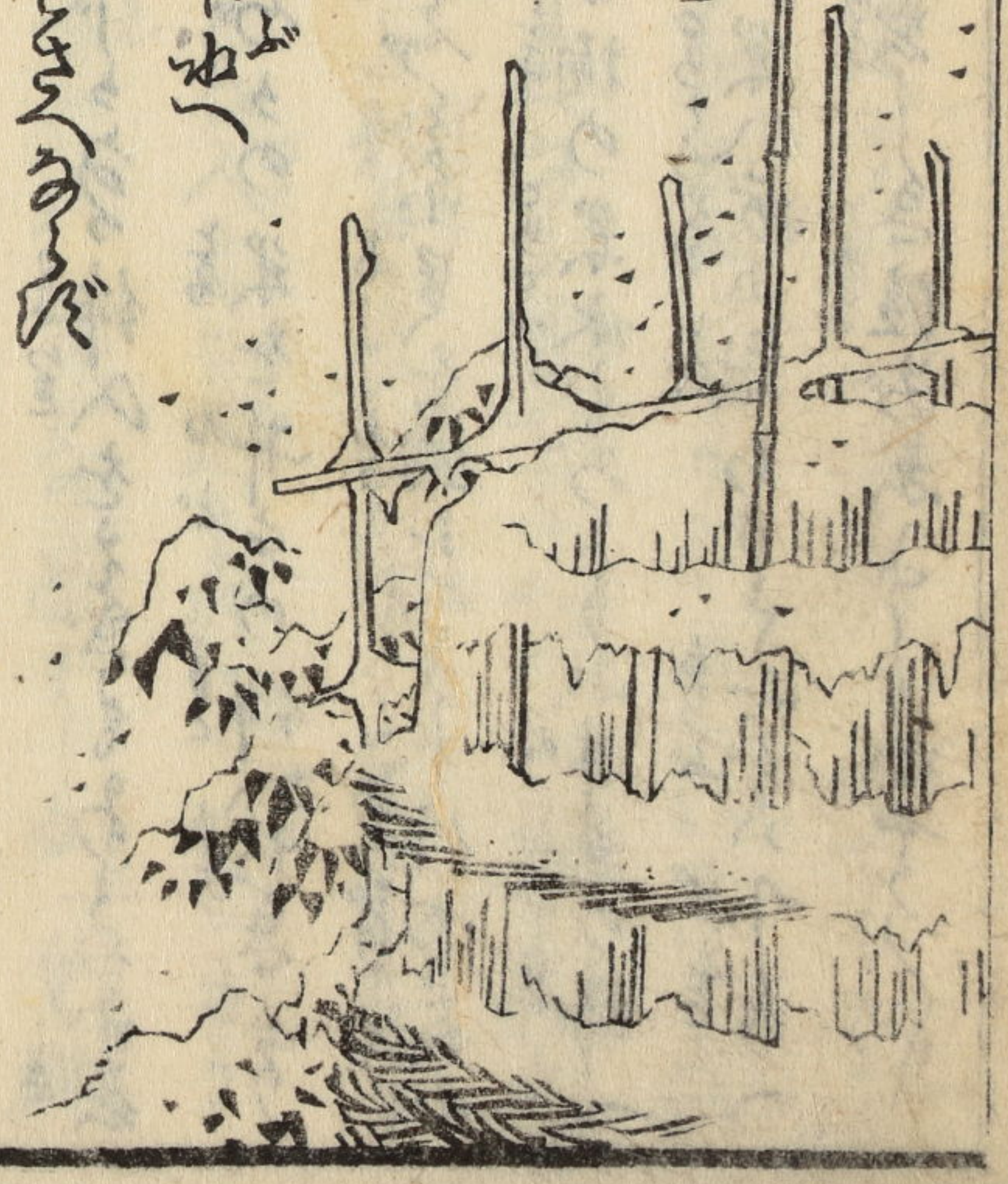
おのふまゝの出来は世見宿祿とせど
 も酒いづも素良の素丸を自のた角か
 大因のまのた
 ねモシ能登ぐ一はしきまはく一まもふ好な登ぐ一ありまはヨ
 はやうサ登おのりちやアぶ人ません津るまの登がどうも
 うまのちやアぶ人ませんうあのおらうまのちやアぶ人ません
 ね親の秘登ぐ一お人ませう子一ナラ一又遠のどもあ
 どんあふ真登ぐらう親遠が強ぬ一登登ぐ一まのま

おのふまゝの出来は世見宿祿とせど
 も酒いづも素良の素丸を自のた角か
 大因のまのた
 ねモシ能登ぐ一はしきまはく一まもふ好な登ぐ一ありまはヨ
 はやうサ登おのりちやアぶ人ません津るまの登がどうも
 うまのちやアぶ人ませんうあのおらうまのちやアぶ人ません
 ね親の秘登ぐ一お人ませう子一ナラ一又遠のどもあ
 どんあふ真登ぐらう親遠が強ぬ一登登ぐ一まのま

もろのころころいしごとくおぼろにまはす子
りふが貧乏を病ふ親父が土地ツをうご娘のまぢげど仕
合せがよくなるやうなく首をくわく死とのめ
せうごころやアとんとねねのちがひをいふ子
と六中めの流石をいふ入らば入るも入らば入らば
けの娘あうちと宅いぬわぬわぬいぬわぬわぬ
しつ時やアよんどんすくすくやアが産の向うハ
貸家ぞおぼろにまはす子とあうわうわうをいふ入らば

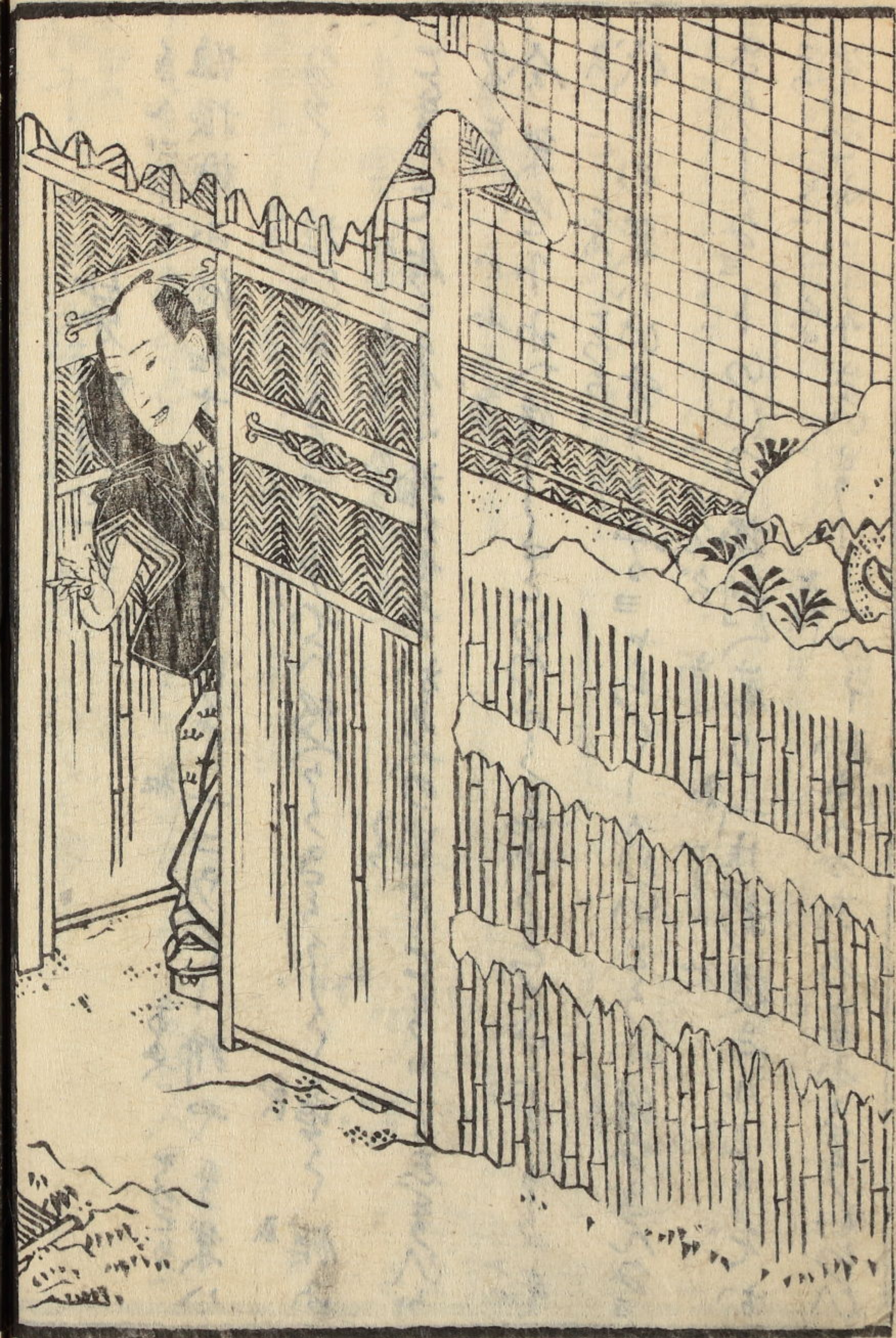
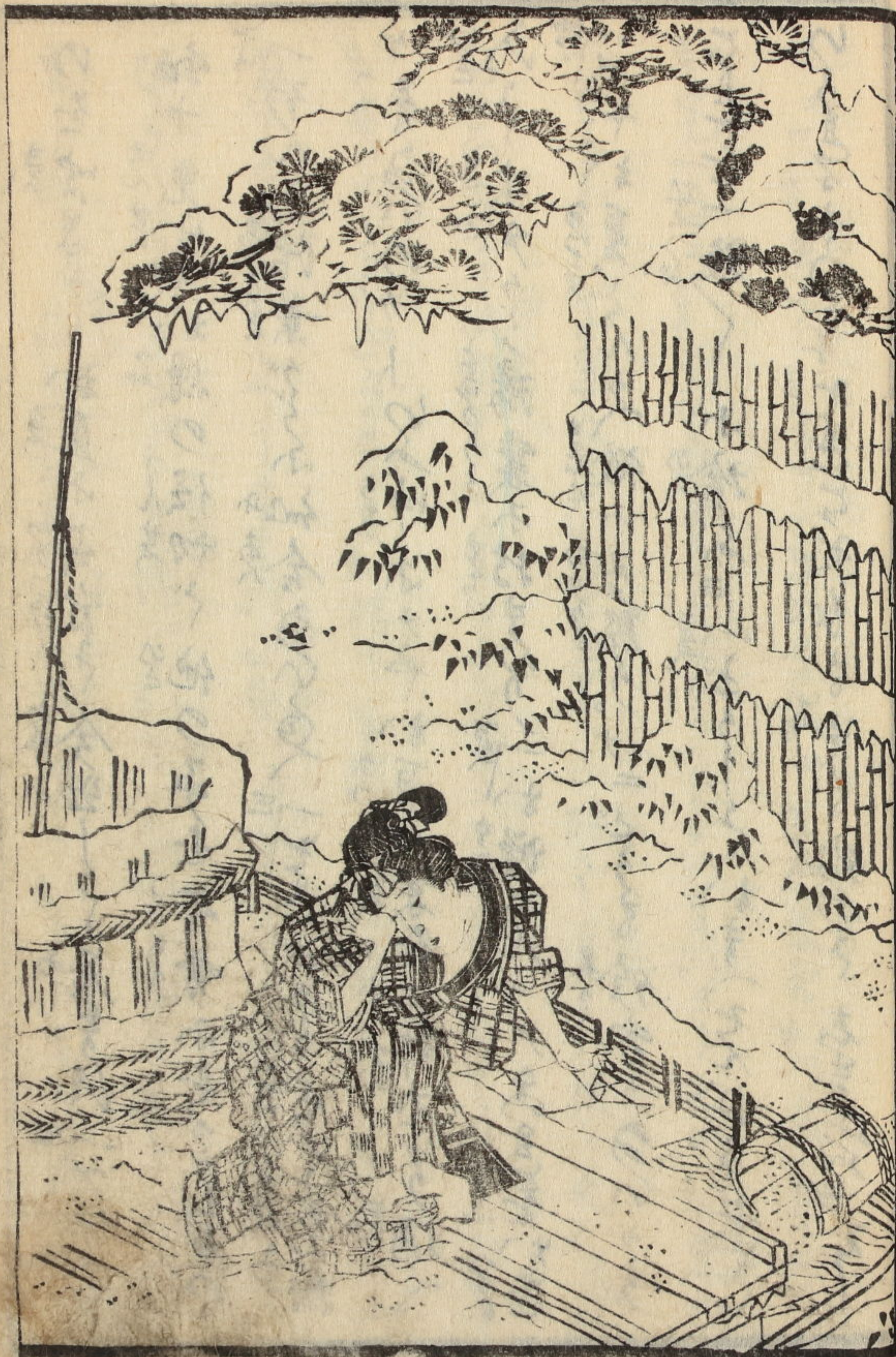
すけく大傳小風が本指をうくつとあふあふいふ
その空を比方の垣根の際めて六依娘あやあうらん
中も寝き肩上の垢とどろあう餅入をいふあうわうわ
あうつ小桶小入コぶらの米を井戸の祥一様いふ
とま流しとくまあがをいふあういふあういふあう
倒るまて今とまあがてる桶の米水もろとも小井戸の流
あうぶ柏子小殺いせむあう八方小花あうの七かハ下あ
あういり娘ハあういりあういりあういりあういり

とこのへー（米）あやあえん
 泣きがらもその身のもの
 さをたたくあきらし流す
 米を捨らんときさどき
 つの雪の中おちくハ下地
 あきらしーろびろふあきらまざ
 一途方ふさく一（心）の中をば方小見居たる三人の中
 和十ハとらへる極根の方（うけ）さく。



第四回上

垣根誠不依和十ハ考をうけ
 コウノ婦や生米ハ
 拾ひて居る雀不捨るせまがりの宅（うち）ごころはもさきひか
 今米を下水へ流す
 代りの米ハは方（うけ）るヨヤレ
 さうしなヨトリひつ（榊）刺り
 是（こゝ）に新造さんとうぞお
 米を少し（くさ）し（ま）す
 アナイおま（か）あの子（こ）ハさう（か）らひ



どののかうまをんハ振ふるよ〜毎々おつきのあつたのふや〜い
 け方どう〜形長格びふおゆらそのま箱入さう〜あると自然
 とおまらんあんでのおあふあのみんヨトらひさつ〜小箱み
 分る集をと〜ゆを二三交波が作り〜その桶はらでもよ
 いろいろアお粘あさしま〜トまを又美知づ〜とや〜くか
 夏ハ別道〜ゆりある。比方ハ産〜ふ不婦夏川の和十八生
 地実義者淳世の中のはあ〜づるをわひやり〜〜と三晩ハ
 向ハ〜とんあモジら〜はさ〜は子もあ〜お〜い〜い〜い〜子

一はらヨおままおあらひ〜はら〜い〜思〜は〜は〜は
 他の心も知〜あ〜〜合〜〜〜〜〜〜〜
 捨〜〜〜の〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜
 て〜〜〜の〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜
 の紙のま風が〜人〜〜〜〜トキニ且取私〜い〜を
 して〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜
 手〜〜〜の且取が山本〜〜〜お〜〜〜
 う〜ト〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

久今教アおもしろい福入^三きりー福の是非^{せひけ}ゆゑに
驚も去付やうがそよよのヤア久^{ひき}ーがりごう今教泊りて
あんぞ福うーい^{さふ}ももあるせ入そのうりあうりとい味
を居地ををさおき、ウも悪い^{まふ}和十さんおらんて喜な
せんからうアヤくそくーて^{あひ}を今教やうのりこア
とどちやア^{あひ}私^{あひ}が着ううおきさん^{あひ}も親^{あひ}換をうさうヨト^{あひ}輝な
うせてとー如^{あひ}在うく^{あひ}き大^{あひ}きくく^{あひ}入^{あひ}入^{あひ}く^{あひ}奇^{あひ}を^{あひ}注
け^{あひ}三^{あひ}曉^{あひ}ま^{あひ}輝^{あひ}ま^{あひ}一^{あひ}費^{あひ}入^{あひ}も^{あひ}款^{あひ}を^{あひ}さ^{あひ}る^{あひ}も^{あひ}産^{あひ}一^{あひ}き^{あひ}の^{あひ}か

を^{あひ}お^{あひ}さ^{あひ}る^{あひ}も^{あひ}あ^{あひ}く^{あひ}お^{あひ}不^{あひ}祝^{あひ}ー^{あひ}性^{あひ}其^{あひ}せ^{あひ}し^{あひ}あ^{あひ}和^{あひ}平^{あひ}も^{あひ}元^{あひ}来^{あひ}
款^{あひ}たる^{あひ}も^{あひ}ぞ^{あひ}く^{あひ}ま^{あひ}ら^{あひ}ぬ^{あひ}お^{あひ}の^{あひ}も^{あひ}り^{あひ}ま^{あひ}は^{あひ}ま^{あひ}ぬ^{あひ}が^{あひ}と^{あひ}ある^{あひ}実^{あひ}意^{あひ}了^{あひ}
ま^{あひ}の^{あひ}せ^{あひ}く^{あひ}イ^{あひ}と^{あひ}ある^{あひ}奇^{あひ}と^{あひ}あ^{あひ}の^{あひ}け^{あひ}は^{あひ}く^{あひ}お^{あひ}を^{あひ}産^{あひ}長^{あひ}一^{あひ}ま^{あひ}う^{あひ}る^{あひ}
今^{あひ}喚^{あひ}入^{あひ}福^{あひ}下^{あひ}を^{あひ}り^{あひ}ー^{あひ}ま^{あひ}さ^{あひ}う^{あひ}子^{あひ}イ^{あひ}ヤ^{あひ}は^{あひ}る^{あひ}わ^{あひ}の^{あひ}ー^{あひ}ら^{あひ}い^{あひ}ま^{あひ}産^{あひ}を^{あひ}
沢^{あひ}山^{あひ}波^{あひ}ま^{あひ}ー^{あひ}こ^{あひ}け^{あひ}ド^{あひ}レ^{あひ}内^{あひ}新^{あひ}造^{あひ}ま^{あひ}ん^{あひ}一^{あひ}お^{あひ}ま^{あひ}ん^{あひ}一^{あひ}中^{あひ}ま^{あひ}せ^{あひ}う^{あひ}且^{あひ}
形^{あひ}入^{あひ}文^{あひ}亭^{あひ}さ^{あひ}ん^{あひ}や^{あひ}文^{あひ}雄^{あひ}さ^{あひ}ん^{あひ}の^{あひ}か^{あひ}仲^{あひ}も^{あひ}で^{あひ}孫^{あひ}院^{あひ}の^{あひ}本^{あひ}お^{あひ}ぶ^{あひ}う^{あひ}う^{あひ}か
波^{あひ}の^{あひ}あ^{あひ}ら^{あひ}る^{あひ}と^{あひ}ら^{あひ}の^{あひ}あ^{あひ}ら^{あひ}め^{あひ}ト^{あひ}笑^{あひ}ひ^{あひ}の^{あひ}う^{あひ}う^{あひ}一^{あひ}五^{あひ}ハ^{あひ}ント^{あひ}扇^{あひ}を^{あひ}も^{あひ}小^{あひ}柄
一^{あひ}コ^{あひ}ヤ^{あひ}あ^{あひ}ん^{あひ}と^{あひ}う^{あひ}う^{あひ}産^{あひ}ー^{あひ}い^{あひ}ん^{あひ}一^{あひ}ま^{あひ}の^{あひ}の^{あひ}な^{あひ}ま^{あひ}ー^{あひ}が^{あひ}ら^{あひ}い^{あひ}せ^{あひ}一^{あひ}五^{あひ}少^{あひ}

楠の中(中)の入り真をあげてハ極楽と
 りんぐと七と見あへて楠であげのまに
 且ねまを南に三宅とまのうらまは
 地獄ぢや

ア~~~~イ~~~~
 ヤ~~~~ヤ~~~~
 且ねもけくちあよみか
 まるちやア~~~~
 且ねもけくちあよみか
 まるちやア~~~~

笑うア~~~~

〇そまへく世の中よのちうのりん何なに小きちひげをい入いて
 着節きやくせつハが万軍まんぐんが教訓きやうくんとも異い名なともあるものあり
 〇ひやく子こが着きせ紙しをを出でて清きよ流りゅうのあふ
 〇うま一ひと向むかひともうまうま父情ふじやうと鐘かねををのの紀き重じゆうと
 おもひおも捨するるいんいんてささ人にん情じやうのをを易やすきをを確た
 とも〜〜自然じぜん娘むすめ子こどののの心こころをを和わげをまを
 ま〜〜くまくまええががあありり巻中まきちゆうの味あじ豈あ教訓きやうくんを

ふありけいせいのき居ても津よりでもきつひりよりある
病ふあがきくありて切落しを百三十二文とせえりてき
居をえんむちるふして一人兼ありぢやアそき居りふりて
仕まつてふ者のお儀を考へていざむいふ會言を上るるを
むよりユむう三百六十日を二百日と割付とせ居り日数二十日も
可ありふあて百日の中づゝあて八十日は休ふるのをせりて
一年を三割一分の法業をえりてむうへは若く六百あ
の結金で束くとし一兩を今千あてりてりてりてりてり
とりふと万事かき合し一やふあをきくする事むり
うむうはあてえんむをりて流形ふちる理が因
の世の八百年も是利の十三代も今のやふ自由のたりの右平
へありふあをえりてアサ且ねあまをんまてりての病をちりあ
のそりてヨサア和十えんむうのゆをわヨエ只今をり
考へてりてりてりてりてりてりてりてりてりてりてりてり
夏方夜食とも量とつふりのさうでいひまのりナニよりの晩
の成刻時かふか我食をせると丁度よりのヨはあうてりてり

ふありけいせいのき居ても津よりでもきつひりよりある
病ふあがきくありて切落しを百三十二文とせえりてき
居をえんむちるふして一人兼ありぢやアそき居りふりて
仕まつてふ者のお儀を考へていざむいふ會言を上るるを
むよりユむう三百六十日を二百日と割付とせ居り日数二十日も
可ありふあて百日の中づゝあて八十日は休ふるのをせりて
一年を三割一分の法業をえりてむうへは若く六百あ
の結金で束くとし一兩を今千あてりてりてりてりてり
とりふと万事かき合し一やふあをきくする事むり
うむうはあてえんむをりて流形ふちる理が因
の世の八百年も是利の十三代も今のやふ自由のたりの右平
へありふあをえりてアサ且ねあまをんまてりての病をちりあ
のそりてヨサア和十えんむうのゆをわヨエ只今をり
考へてりてりてりてりてりてりてりてりてりてりてり
夏方夜食とも量とつふりのさうでいひまのりナニよりの晩
の成刻時かふか我食をせると丁度よりのヨはあうてりてり



ふと人^和不^和正^和ニ他^和のちぢやアア人^和を^和と^和ま^和け^和る^和日^和け^和ご^和ろ^和
室^和の^和も^和は^和ら^和ま^和り^和し^和ま^和せん^和ト^和ま^和よ^和る^和中^和障^和裏^和小^和室^和の^和女^和の^和あ^和ま^和
夏^和ハ^和こ^和ろ^和ふ^和お^和増^和の^和淫^和婦^和と^和お^和夏^和か^和り^和ハ^和梅^和柳^和より^和理^和く^和三^和曉^和女^和
房^和お^和その^和実^和小^和思^和ハ^和業^和ト^和ら^和ま^和る^和ま^和も^和そ^和ま^和と^和る^和え^和ら^和る^和和^和
十^和八^和ト^和女^和小^和案^和内^和を^和ま^和さ^和る^和本^和を^和ま^和ま^和る^和一^和イ^和ヤ^和大^和造^和小^和
障^和ト^和来^和る^和の^和弟^和ま^和く^和お^和夏^和ど^和ん^和小^和路^和半^和小^和室^和の^和目^和を^和ま^和
さ^和る^和、^和ウ^和増^和あ^和く^和お^和ん^和ま^和る^和ま^和ら^和り^和再^和交^和ま^和る^和前^和あ^和ハ^和能^和
の^和を^和大^和産^和お^和も^和る^和ま^和さ^和る^和上^和を^和ま^和一^和ナ^和ア^和二^和松^和や^和ア^和室^和く^和ハ

あ^和ま^和の^和ま^和せん^和ヨ^和ア^和く^和く^和あ^和ん^和が^和世^和を^和ら^和ば^和と^和ら^和る^和ハ^和雪^和か
さ^和く^和あ^和る^和も^和あ^和る^和あ^和る^和一^和お^和夏^和ど^和ん^和ど^和う^和ま^和く^和あ^和ら^和う^和
夏^和一^和ヨ^和か^和一^和イ^和エ^和ま^和む^和の^和と^和せ^和が^和今^和仕^和る^和お^和ま^和ん^和ま^和の^和ま^和は^和隣^和り
裏^和の^和お^和増^和ま^和ん^和と^和ら^和の^和ハ^和ま^和ど^和ま^和る^和ま^和あ^和ん^和ま^和る^和ま^和の^和と^和ね^和
ま^和は^和ヨ^和一^和は^和ら^和う^和何^和ふ^和一^和ら^和ら^和い^和さ^和う^和ま^和る^和ど^和ト^和ま^和ら^和一^和あ^和ら^和う^和
ま^和ハ^和隣^和ま^和の^和末^和戸^和を^和ハ^和り^和彼^和お^和増^和と^和の^和娘^和の^和あ^和ま^和を^和ま^和ら^和
小^和室^和の^和着^和ま^和る^和ま^和ま^和る^和ハ^和大^和病^和の^和少^和一^和正^和毒^和を^和ま^和ら^和一^和あ^和ら^和い^和
お^和ま^和僧^和の^和あ^和ま^和を^和ま^和ら^和ハ^和常^和病^和の^和如^和く^和の^和中^和小^和室^和を^和ま^和ら^和

居るいづれホーも経治の病とつてをり 要漢二人あり
娘お増の後のを吐きうらなぬーテうーとウ。コレをうて
方々いけがらうらうらものびアイトもも親父うらうら
の隙うで於今日あんなどのうらうらうらうらうらうら
あるうらう。アイトあぶとの思女ア昨日あぶの節お親父を
お連うらうのをを方々がうらうらうらうらうらうらうら
悔うこのうらうら方かやうらうの女弟をへうらうのうらう親
父をうらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうら
居ても親父を連うらうらうらうらうらうらうらうらうらうら
うらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうら
親父さんうらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうら
親父へもももももももももももももももももももももももも
うらう。コレうらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうら
て雪の後のふれは仕入ハ。サア方々うらうらうらうらうらうら
金をうらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうら
親父をうらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうら

移くア引親不孝な思女ごとうらうらうらうらうらうら
居ても親父を連うらうらうらうらうらうらうらうらうらうら
うらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうら
親父さんうらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうら
親父へもももももももももももももももももももももももも
うらう。コレうらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうら
て雪の後のふれは仕入ハ。サア方々うらうらうらうらうらうら
金をうらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうら
親父をうらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうら

くご 見煙をくごしらくハラクハ方がむりの友達のようとと
おのろく世結を一そもちらまうる人ノサア親父を連れて往らす
トまさにまうるを和十八をとけモレ感三おけるせト破戸
まうりと押して送入バ二人の悪漢ハ元来根のまじ要什
ゆゑ内心を毒味さるく胸ギガリ和十八正産小押車りと二
人の悪漢を理詰ふテ以場の恥辱を救ひしとぞ
○あの一條ハ孝子の堪難をあるして慈歎をそく
看官小表且を借はまさるのまわりと當世の仁

政小あるづきに理あけ且バ和十の悪漢小後射を
まる辰をくくとまさびららハ善心の報を
ららしとつつららしとのと承知しとぞ
まん三曉が隣裏ある貧家の娘といふ彼万善徳の娘也
例の孝行ハ勝りそも万善徳ハ救傷の人小務負の例
おを好むとまじを活業のごとくあせしとどか勝が孝小恥
らひと忽ち形状をあらとめけるが前世の福業拙ありて
也不角勝命のお績き女房ハ清も病死しとその身

も病毒の床不伏子三十日を十日あきりハりりも終らふ
やうなりしゆ及心筋の住居よりまじ一際麻末なるこの西ハ
うつりしとどかくては終る病ひぢらあぐあひし中し
日の要漢仲名が今ハ友達あつぎる万葉勝るまじあつぎりの田
き失を大さうふうぞくそふふきるまじくもまじまじ砥さぬ
の庄候といひりり万葉勝を獄不送らんとしつてをを送
まじあつ娘をさうりまじくも金を調てまじく不返併
まじくとあつりりり病とありし後ハ中次の強勇不
えなまじくししぬ人とありけし今宵要漢ホがまじく
万葉勝を引まじく娘をまじくし不敷さつけんともまじく孝行
あるが坊のぬ不附込あつぎる身をうらせんとしあつりしとど
あつ和十八三曉小云附是万葉の己けをまじくし三曉小全
をいふとせ何もうも巧付て後三曉ハ晴津くも万葉小医者
をいけ療治まじくあ坊不ハ衣取を与ハ父の金銀をまじくし
活業を助力くまじくまじくまじくまじくまじくまじくまじく
天のあませとあつとあつと

も病毒の床不伏子三十日を十日あきりハりりも終らふ
やうなりしゆ及心筋の住居よりまじ一際麻末なるこの西ハ
うつりしとどかくては終る病ひぢらあぐあひし中し
日の要漢仲名が今ハ友達あつぎる万葉勝るまじあつぎりの田
き失を大さうふうぞくそふふきるまじくもまじまじ砥さぬ
の庄候といひりり万葉勝を獄不送らんとしつてをを送
まじあつ娘をさうりまじくも金を調てまじく不返併
まじくとあつりりり病とありし後ハ中次の強勇不

孝女 貞婦 娜真都 翳喜初編中之巻終

孝女 貞婦 娜真都 翳喜初編下之巻

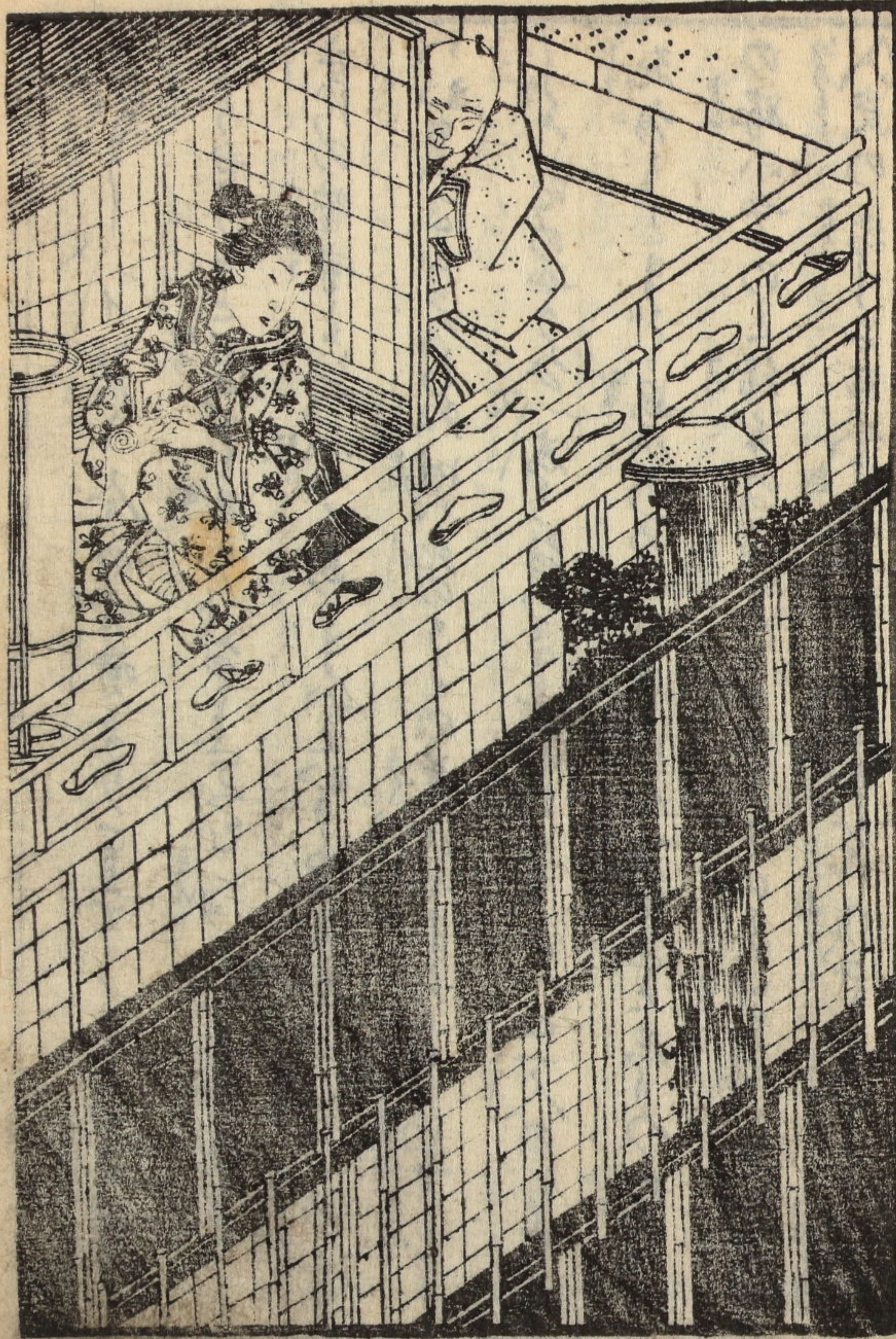
江戸 狂訓亭主人著

第五回

凡浮世の吉凶定りて常ある事ありて身一ツ小
かゝる世に生きるの思ふ歎きの人公世をも他をも恨がむと
望むは縁なき別ありけりおのれ世の苦の世界と悟りて
を願ふ時世をば花咲きふ合ぬあとも長き月日あるべし
やふふ小孝女が憎む山麓の住居殊川の地ををば表小住

Handwritten text in a cursive script, likely a historical record or account. The text is written in a dark ink on aged paper. It consists of approximately 10 lines of text, with some characters appearing to be in a different script or dialect than the main body of text. The lines are roughly horizontal and fill most of the page's width.

Handwritten text in a cursive script, continuing the narrative or record from the previous page. The text is written in a dark ink on aged paper. It consists of approximately 10 lines of text, with some characters appearing to be in a different script or dialect than the main body of text. The lines are roughly horizontal and fill most of the page's width.



てぬ男あり大なるかもの女主人の亭主當分他西三母
りあやう 叔小世帯を申しさすくわの元女ハおきだ女老どいも
あらせぬ金の都合何れの支交衣類をも二交々三交小出
く中りやトのさる方あき父の養映見世の方とやぐ候を
きぐい娘のうき一さまおや 親ふらうらうきとふまきしや七
と小泣側あき してく生解ありぞりええふけり

○そもく一二の巻ふあう一方増の苦勞と六
をあき ちもむきのうらまじもあき 親子の情合ハ負あき さま

福多あるも同くあき 多小くそきくの苦勞ありは
お増の孝あき 知とわ方の久情中あき 親小若帯をうけり
と一ッふりりあき ばさうら福どあき 万も無情の中あき 小孝心
も又あき 仕候ふらうくあき 娘人のぬ小辛若をあき 願ハあき 毛令
を捨てる男あき をあき せあき くとあき ああき ぶあき びあき 一あき 交あき ハあき 親あき のあき 目を
ああき のあき びあき 一あき らあき づあき 一あき 一あき ああき じあき どもあき 既あき 小あき 錦あき をあき 捨あき てあき 遣あき ふ
産あき ふあき のあき 産あき ぎあき 産あき 一あき ぶあき 一あき 一あき 目あき をあき 悔あき まあき せあき 一あき 一あき
大あき 文あき 夫あき のあき ああき きあき 一あき 一あき 標あき せあき 一あき 一あき 女あき 産あき とあき らあき づあき 一

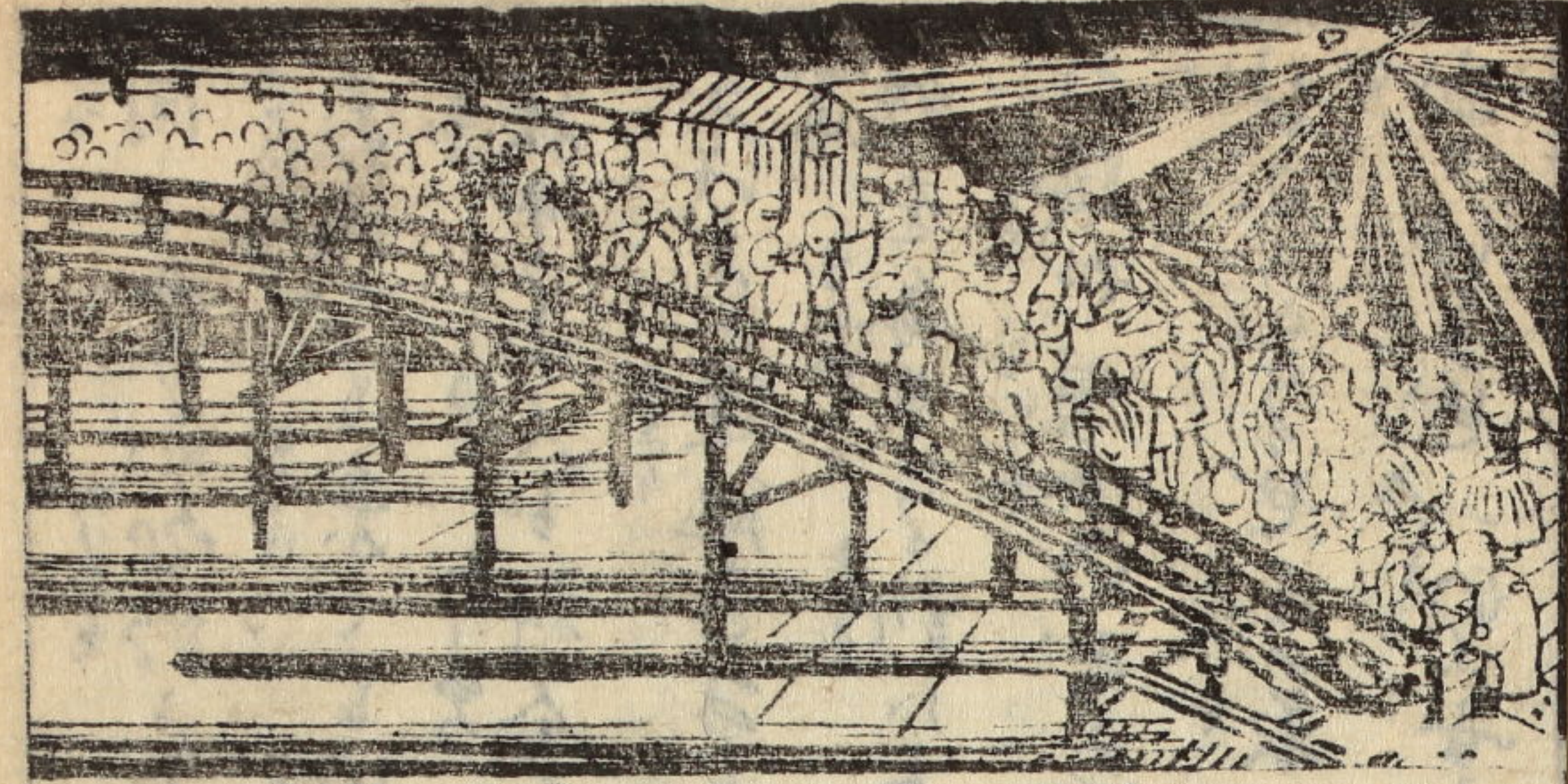
舟の
 燈を六つ火の火を
 一條下を流す感
 情

あらんり

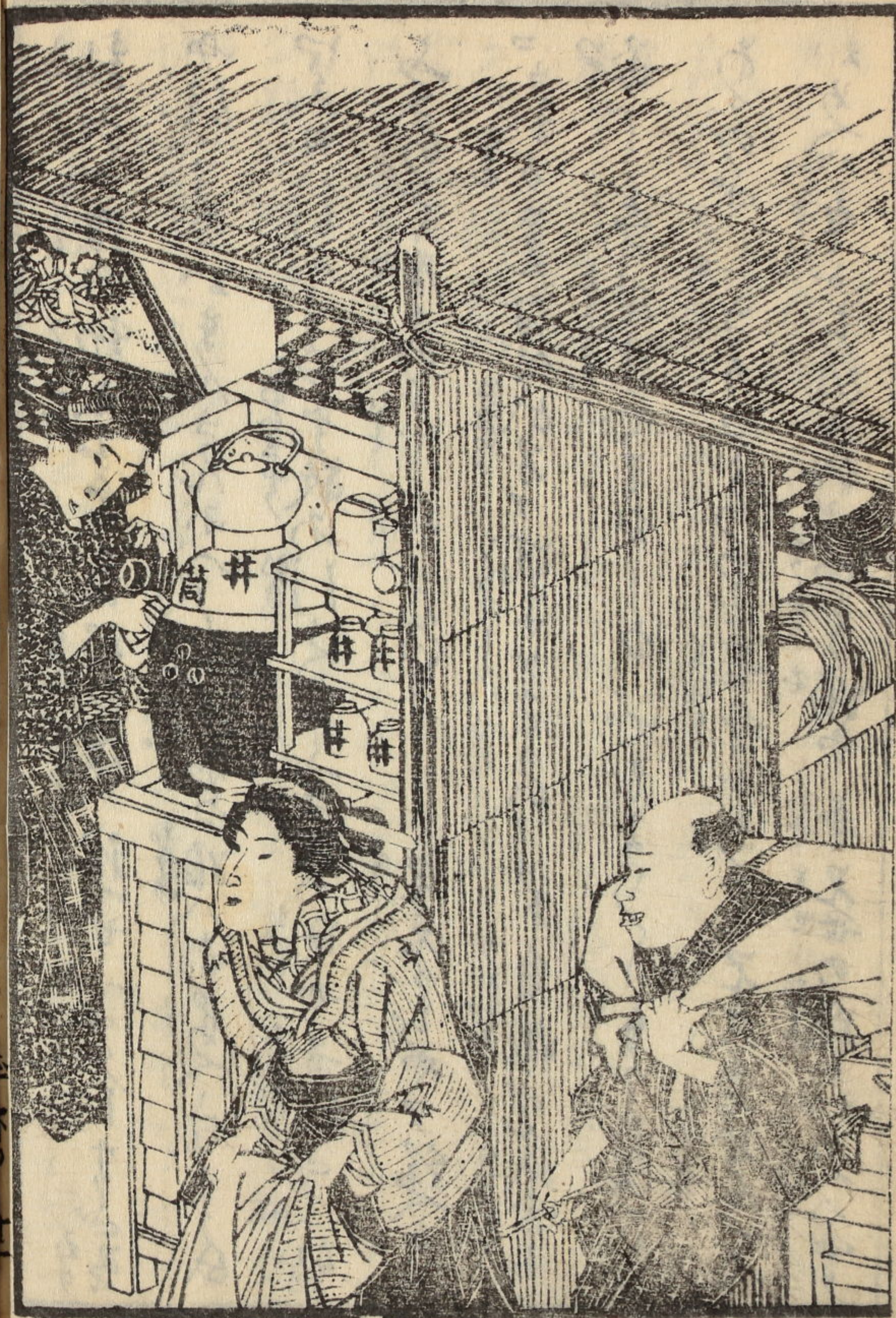
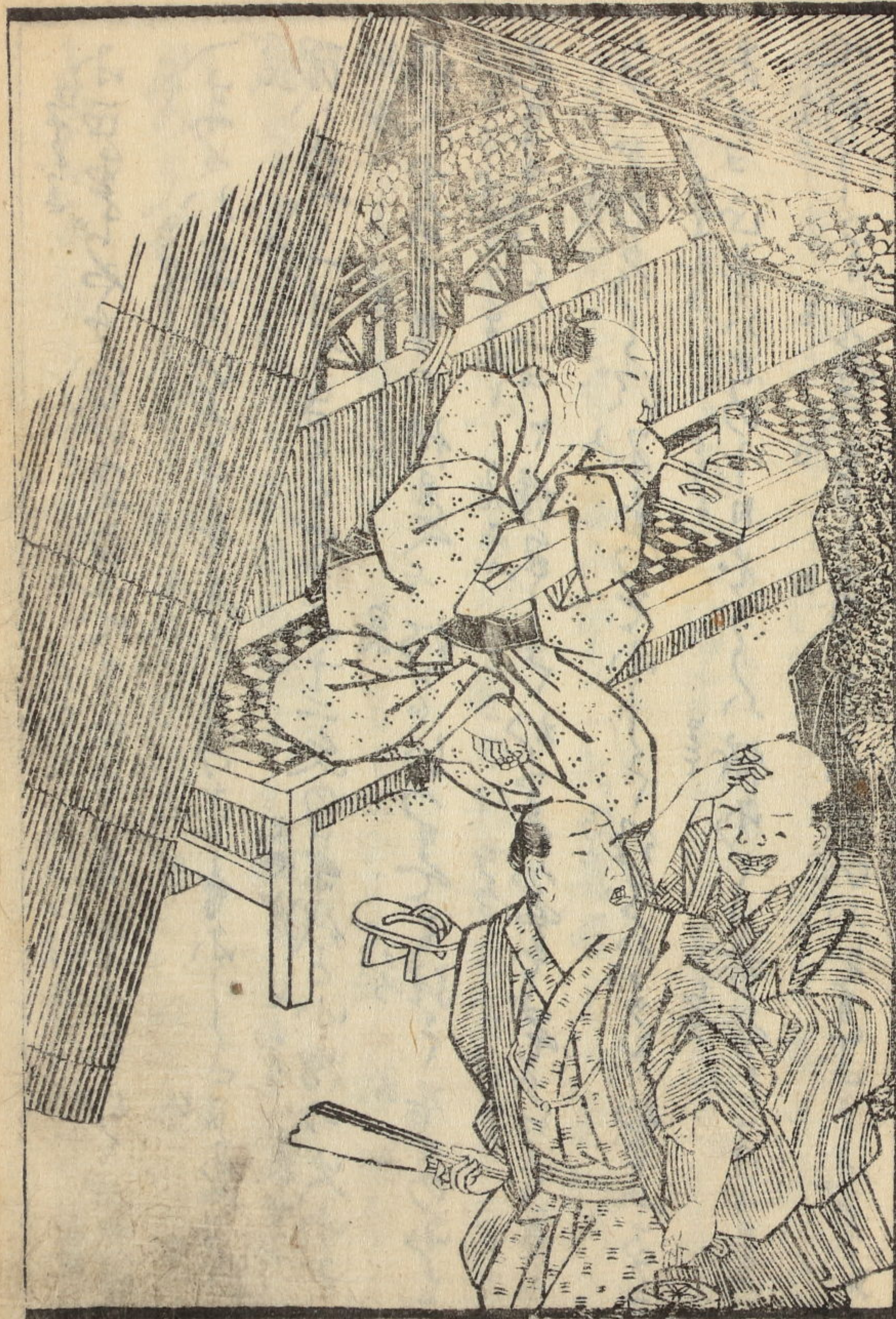
第六回



目ふねまき月小舟をりまむまきまも
 まに河まが毛源の繁昌りも文章の
 目ふねまき月小舟をりまむまきまも
 および浪画工のちちまきまのまきまも
 まふがまきまのまきまも



あるまきま月小舟をりまむまきまも
 まに河まが毛源の繁昌りも文章の
 目ふねまき月小舟をりまむまきまも
 および浪画工のちちまきまのまきまも
 まふがまきまのまきまも



小豆板をぢやケリひてんぞまてしめふくかくサニセ
 一あるお客のしるしをまふろけく音ふく一一目や際
 限へて一イヤさうぶが三十二文の兼代と小摺の火小ぢ
 婿人おある音の侍具イヤ何ぢらうまで強く居るのあま
 あまのヨウケヨヤ提具くむもこもあまをぢうばまき
 るいがおろくづぶあつたふく一と強でハッソあめあまが
 あるヨ正裏八ら十日をくりハ強あく一苦勞なるがあつ
 て朝くくえせくむく居るそくあつたとまてさうタイ

客も藤あふあるヨトしりひるぞうホロリとあまは漬のあま
 と何とくあまのあまびふあまも兵士の巻敷あるづ一地也
 りの若危も音の毒あまり一その苦勞も大畧知つて
 むろがたまをりふとあ人のえせの物アもあらうしける
 風極でもさるあうお思ろてもさういらう知く移入風をく
 居るが寒くおあ人の苦勞の始末今強我をさる友さん
 どの人もまんぎら知く身申でなる一から一遠のあま
 とくくあらうぞうでも一とあつて何をもあふも筋の

己のいものと一連ふらうと同類の悪名が付ちやアめらう
小口もあつてさういふがどうぞ理害がまばらけはどアやア
幼弱なまうと友達の前へどうつと居るといふちやアどう
疑ひをうけるはけさしサア七通も私をうまひまう
まゆふあつと居るといふ私までも疑義をまうくと思ふを
ううあまあいやふまうとゆゑあつとつと長家のお
方もさうままひら今さう私がお悪戯を致つてもしけま
う福へトといふどう鼻紙を中へと涙をうくを不佞小思

ハバ佐切ふ一さぞ苦勞だらうが實は友さんの知らぬ
ざらうらう始終院正のうへ福入りもあるわけと抱え
まごが藤倉合と悪漢めらのうへに仕業の金をひき
後々御方を仕やうとさういふまうと申へに御座らうけ
どさもうけりやア友さんがいらつてもう一人が居るア
めあつとア荒波の首でもあつて仕業田舎の殿どう
まのげらうがさうヨ友さんらんざア元が息子様といふ者
うういふとどうぞを申へに御座らう不佞小思

おも金のまのまぐらら珍うら方がぐら。
 けきにまままししららもも徳とくのの
 ちちるる一いちちががああららせせややせせらら一いちちがが淋しみとと壺ひ人びとが
 ちちるるののうう一いちちやや何なにももああららせせううどど一いちちががああららせせううアア書あのの方かた
 人ひとががああららせせららのの一いちちががああららせせううののままあありりががううトト又また送おくり
 ろろううももああららせせららのの性しやう東とうのの人ひとのの世よのの時ときももけけははよよととるる憂うれ苦く
 勞らう拘くのの法ほう久くふふ面めんををせせららるる一いちち方かたをを思おもひひ出だささるるかかののののらら
 らら一いけけははよよららるる歎なげきののあありりぞぞもも知しららずず同どう來らいるるららととのの露つゆ
 ああららせせららるるももああららせせららるる一いちちががああららせせららるるととのの並ならびび茶ちやのの

射のををららるる一いちちががああららせせららるるととのの時ときももけけははよよととるる憂うれ苦く
 ととももああららせせららるる一いちちががああららせせららるるととのの時ときももけけははよよととるる憂うれ苦く
 谷やのの下した吹ふけけたたららるる一いちちががああららせせららるるととのの時ときももけけははよよととるる憂うれ苦く
 風かぜががああららせせららるる一いちちががああららせせららるるととのの時ときももけけははよよととるる憂うれ苦く
 ととももああららせせららるる一いちちががああららせせららるるととのの時ときももけけははよよととるる憂うれ苦く
 ぬぬららトト一いちちががああららせせららるる一いちちががああららせせららるるととのの時ときももけけははよよととるる憂うれ苦く
 のの声こゑととももああららせせららるる一いちちががああららせせららるるととのの時ときももけけははよよととるる憂うれ苦く
 おお出いででららるる一いちちががああららせせららるる一いちちががああららせせららるるととのの時ときももけけははよよととるる憂うれ苦く

小きしひもせぬ世草の若勞他のまげんの上〜あゝ
付く舞うの心葉のせむひやう〜そ方の舟の上とら
やう自らかせしやうのまぞ何もの不自けりゆあう〜しやう入
ふしあうぼちらうの心葉のまげんとゆる〜葉とら
音をらあをき知らう〜響とらひのよう〜びそ色とら
うとらぬむらうひ方もあはれ〜さうぬ風信業とらぬまぞの
えんがう
勅諭もあはれ〜後むらうのま〜まは知つて〜居るゆゑ
ど世界の元ハ縁切と親子の中ゆあ悔をとり人まらう

のが口惜さ懐へう〜でもツイそ色とらま〜こあらぬ世界のま
ま〜附あまの山のま〜う〜かま〜まの心葉なり〜あ
何やうあなま〜まぬ娘の在制二三度ら〜を性度り〜
まう〜そ方を又つけよ〜あらやトら〜びと〜ま〜まんハあはれ
心葉思ひづ〜ソダツト声をあげ父の隣〜まがり付〜系考
心葉をそのやう心葉〜〜心葉の勿辨あ〜ま〜
トら〜ま〜〜ら〜〜ま〜〜あ〜〜あ〜〜と〜
のび〜ま〜の〜い〜ま〜せん〜ま〜〜ら〜と〜あ〜ま〜ら〜

表向幼島一すも道が甚細そのやアとまうくも苦勞不
る先判のそり一りつ〜あの人か知らぬるをまきぞい
ちまひひけあぶ友達のあうちつ中々とよそのおな婆の
及々の金をひ方々舞くよるとり格ふ〜とあうむ
どうり友次郎の海がうりも免〜と苦入るふとあうら
とくり人の他目〜とあうらるる〜幼島に
何もうも不自はぬああ出来ぬ〜一か〜とてみるもあう
さうでもあるとぢのやうふ金を舞〜とあうらるる〜とり及

ハロシ〜除〜とあうらるる〜とあうらるる〜とあうらるる〜
モウ人の捨りのものもあうらるる〜とあうらるる〜とあうらるる〜
り〜とあうらるる〜とあうらるる〜とあうらるる〜とあうらるる〜
る人〜とあうらるる〜とあうらるる〜とあうらるる〜とあうらるる〜
お怪〜とあうらるる〜とあうらるる〜とあうらるる〜とあうらるる〜
来〜とあうらるる〜とあうらるる〜とあうらるる〜とあうらるる〜
ふあ〜とあうらるる〜とあうらるる〜とあうらるる〜とあうらるる〜
人の若者〜とあうらるる〜とあうらるる〜とあうらるる〜とあうらるる〜

せん^ら性^{せい}を^をモウ^う裏^{うら}の^のお^おだ^だん^んが^が残^{のこ}り^りを^を運^たん^んが^が志^しま^まし^して^て性^{せい}
中^{ちゆう}一^{いつ}ト^とキ^きニ^に友^{とも}さん^{さん}ハ^ハと^とん^んが^が英^{えい}語^ごを^を傳^{つた}へ^へる^ること^{こと}ハ^ハ自^{みづか}ら^らの^の性^{せい}
不^ふ安^{あん}中^{ちゆう}一^{いつ}ガ^ガ私^しの^の親^{おや}父^{ちち}ハ^ハ島^{しま}山^{やま}の^のお^お中^{ちゆう}一^{いつ}ハ^ハ出^で入^いり^りの^の事^{こと}ハ^ハ不^ふ始^し
子^こも^も親^{おや}と^とな^なり^り今^{いま}中^{ちゆう}一^{いつ}ハ^ハ子^こ私^しより^{より}親^{おや}父^{ちち}ハ^ハと^とな^なり^り
つ^つく^く居^ゐて^て子^こ役^{やく}人^{にん}流^{りゆう}の^のお^お中^{ちゆう}一^{いつ}ハ^ハ子^こ私^しより^{より}親^{おや}父^{ちち}ハ^ハと^とな^なり^り
お^お中^{ちゆう}一^{いつ}ハ^ハ内^{うち}か^か外^{そと}か^かの^の事^{こと}ハ^ハ子^こ私^しより^{より}親^{おや}父^{ちち}ハ^ハと^とな^なり^り
う^うう^うあ^あん^んが^がお^お義^ぎ母^ぼの^のお^お中^{ちゆう}一^{いつ}ハ^ハ子^こ私^しより^{より}親^{おや}父^{ちち}ハ^ハと^とな^なり^り
と^との^の性^{せい}を^を子^こ私^しより^{より}親^{おや}父^{ちち}ハ^ハと^とな^なり^り

麻^あく^くハ^ハい^いハ^ハが^がさ^さう^う一^{いつ}種^{しゆ}と^とも^もぢ^ぢう^うハ^ハい^いハ^ハが^がさ^さう^う一^{いつ}種^{しゆ}
お^お中^{ちゆう}一^{いつ}ハ^ハ金^{かね}を^を知^しら^らず^ず一^{いつ}旦^{たん}淋^{りん}ハ^ハい^いハ^ハが^がさ^さう^う一^{いつ}種^{しゆ}
ら^らう^う一^{いつ}種^{しゆ}ハ^ハ一^{いつ}旦^{たん}淋^{りん}ハ^ハい^いハ^ハが^がさ^さう^う一^{いつ}種^{しゆ}
お^お中^{ちゆう}一^{いつ}ハ^ハ金^{かね}を^を知^しら^らず^ず一^{いつ}旦^{たん}淋^{りん}ハ^ハい^いハ^ハが^がさ^さう^う一^{いつ}種^{しゆ}

形^{かたち}母^ぼ一^{いつ}ハ^ハ相^{あひ}傳^たへ^へて^て氏^し次^じハ^ハ各^{かく}一^{いつ}別^{べつ}異^いなる^{なる}事^{こと}なり
二^{ふた}編^{へん}不^ふ平^{へい}なり^{なり}一^{いつ}編^{へん}ハ^ハ實^{じつ}云^い友^{とも}次^じ郎^{らう}の^の親^{おや}を^をま^まと^とす
古^{ふる}今^{いま}の^の入^い情^{じやう}を^をあ^あら^らは^はい^いもの^{もの}なり

孝^{かう}女^{にょ} 真^ま都^と 翳^{あせ}喜^き 初^{はつ}編^{へん}下^げ之^の卷^{まき} 終^{つひ}

